

[研究論文]

「社会性と情動の学習」(SEL)と教育的公正  
ーアメリカでの CASEL SEL-EXCHANGE の資料をもとにー

Social and emotional learning (SEL) and educational equity:  
Discussion based on the report of CASEL SEL EXCHANGE in U.S.A.

小 泉 令 三

Reizo KOIZUMI

福岡教育大学教職実践ユニット

(2020年1月30日受理)

本論では、2019年10月2~4日にアメリカのシカゴで開催された CASEL SEL-EXCHANGE 大会に筆者が参加して収集した資料をもとに、アメリカでの「社会性と情動の学習」の今後の動向として、教育的公正 (educational equity) 及び SEL に関わる大人の重要性があげられていることを踏まえ、この点におけるわが国の「社会性と情動の学習」の意義について考察した。

キーワード：社会性と情動の学習，教育的公正，CASEL，教師，保護者

### CASEL 及び SEL

アメリカの NPO である CASEL (Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning: キャセル) は、下で説明する社会性と情動の学習の普及を目的に、1994年に設立された団体である。2019年10月2~4日にアメリカのシカゴで CASEL による SEL-EXCHANGE 大会が開催された。この大会は、CASEL の設立 25 周年を記念しての交流会として開かれたもので、平易に訳すと「キャセルという団体による社会性と情動の学習交流会」となる。CASEL は種々の社会性と情動の学習プログラムについて、エビデンス (科学的根拠) にもとづく効果を重視し、それを連邦・州・各地の教育委員会や教育団体に働きかけて、実践と継続を図ることを目的としており、事務局はシカゴにある。

ここで、上で述べてきた社会性と情動の学習 (social and emotional learning, 以下 SEL) について説明を行う。これは、「情動 (感情) の理解と管理、積極的な目標設定と達成、他者への思いやりと表出、好ましい関係づくりと維持、責任ある意思決定について、子どもおよび成人がこれらを実践するための知識、態度、スキルを身につけて効果的に利用できるようになる過程」(Collaborative for

Academic, Social, and Emotional Learning, 2012) と説明されている。わが国ではより簡潔に、「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした、対人関係に関するスキル、態度、価値観を育てる学習」(小泉, 2011) といった説明もされている。SEL は特定の学習・教授方法を指すのではなく、枠組みあるいはプラットフォームといった位置づけであり、アメリカでは SEL に用いられる学習プログラムが多数開発・実践されている。

### CASEL SEL-EXCHANGE の概要

シカゴ市内の大きなホテルを会場に、1日目にブレカンファレンス、そして2・3日目に本会議がもたれた。参加者は約1,500人に及びおもに教育関係者 (教育委員会、教職員、教育団体など)、研究者、教育関連企業の関係者などである。

本会議では、5本の全体会と5本の分科会の時間帯がびっしりと組まれ、分科会では合計116のセッションがもたれた。また、2時間のポスター発表の時間も独自にもたれ、130本の発表があった。全体で900を超える発表申し込みがあったということで、関係者の関心の高さが窺われる。正直なところ、分科会では参加してみたいセッションが同時

表 1 分科会セッションのシンポジウム等の主テーマ（概要）による分類

主テーマ	小中高等 学校での 実践	公正	教師関係	アセスメント	コミュニ ティでの 実践	学校外施 設等での 実践	保護者関 係	その他
シンポジ ウム等の 数 (%)	27 (23)	16 (14)	14 (12)	13 (11)	9 (8)	8 (7)	3 (3)	26 (22)

(注) 表内の数字はワークショップも含み、総数は 116

に別の会場で開催されていることもあり、時間がずれていれば両方に参加できたのにと残念に思う時間帯もあった。

本会議ではこれら以外に、早朝 6:15 からの体験型ワークショップがあったり、終日にわたる各種の展示が夜 8:30 までもたれたりするなど、実に盛りだくさんの内容であった。展示の特徴は、50 を超える SEL プログラムを提供する営利企業や各種団体がブースを設けて、それぞれが開発した学習プログラムや教材等の売り込みを行っていたことである。

### 分科会セッションのテーマから見る アメリカの動向

分科会セッションで開かれた 116 のシンポジウム等を、特徴があると考えられるテーマによって分類したものが表 1 である。一つのセッションに複数のテーマが含まれるものもあったが、敢えて中心となるテーマに絞り込んで集計をおこなった。したがって、今回は絶対的な分類ではなくあくまでも概要としての集約であることを断っておく。

### SEL と教育的公正

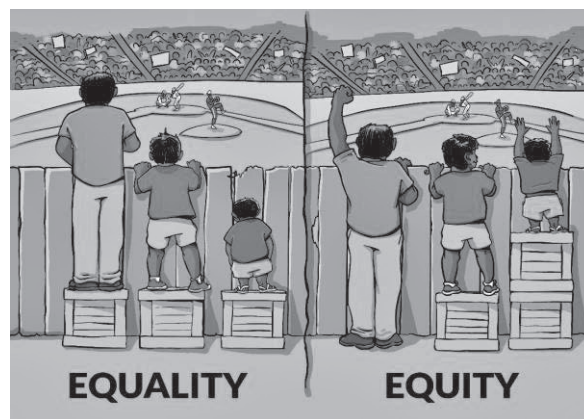
SEL 実践の基本は学校であるから小中高校での実践に関するものが多いが、それ以外にまず注目したのが教育的公正 (educational equity) に関するセッションの数である。わが国でも、特別支援教育の合理的配慮に関して、教育における平等と公正の違いが言われることがある。そこでは、両者の違いが図 1 を用いて説明されることがあり、全員に同じ高さの台を用意する (平等) のではなく、“各人のニーズに合わせた台”を用意すれば (公正)、全員が野球の観戦を楽しむことができることを表している。この“各人のニーズに合わせた台”の提供が合理的配慮に当たるという意味である。この公正の概念が、どのように SEL に該当するのか。

アメリカは多民族国家であり人種や文化的背景等も多様である。しかし、伝統的に英語を話す白人が社会の多数派あるいは主流派であり、それ以外

の人種や文化的背景をもつ人々は少数派として差別される傾向があるために、それが社会的な分断と偏見を生んできた。その結果、差別される側の子どもたちの家庭や地域社会は教育環境としては好ましい状態であるとは限らず、それが学校環境への不適応状態をもたらす原因の一つとなっている。例えば、問題行動のために停学や退学となる生徒の割合は白人と有色人種の間で差があること、さらにこれには教師の側の判断における二重基準の問題があることが報告されている (Skiba, Horner, Chung, Rausch, May, & Tobin, 2011)。すなわち、不適応行動には子どもの学校外の育ちの環境の中での対人関係の持ち方や規範意識・規範行動の違いと、教師の判断基準のゆがみによる両方が関係しているのである。

こうした人種や文化的背景の違いからくる教育上の問題に対して、間接的ではあるが SEL の効果がエビデンスとして示されている。すなわち、SEL は有色人種や社会経済的地位 (socioeconomic status) の低い家庭が多い地区で実施されることが多く、研究成果として行動や学業面での効果が報告されている (例: Durlak, Weissberg, Dymnicki, Taylor, & Schellinger, 2011)。こうした成果をもとに、学校教育の基盤をそろえる教育的公正の観点から SEL が注目されていると考えられる。

ただし、この観点からは現在の SEL の問題点と



(平等)

(公正)

図 1 平等と公平・公正の違いを表した図  
(出展) Maguire (2016).

表2 CASEL が提唱する5つのコア・コンピテンシーの従来の説明と公正を重視した内容の比較

コンピテンシー	従来の説明 <sup>1</sup>	公正を重視した内容 <sup>2</sup>
自己への気づき (Self-awareness)	自分の感情に気づき、また自己の能力について現実的で根拠のある評価をする力	これには、自己のモチベーション・ <u>個人的アイデンティティ</u> ・目標・価値をおくものを含む。自分の強みと限界の正確な評価、積極的な考え方、根拠のある自己効力感と楽観的な見方も含まれる。高いレベルの自己への気づきには、自分の <u>個人的アイデンティティ</u> と <u>社会文化的なアイデンティティ</u> のつながりを理解する能力と、思考・感じ方・行動が相互にどのように関連しているのかを認識する能力が必要である。
自己のコントロール (Self-management)	他者の感情を理解し、他者の立場に立つことができるとともに、多様な人がいることを認め、良好な関係をもつことができる力	これには、情動と行動を統制する能力を促進するためのスキルと態度が必要である。また個人的で教育的な目標を達成するために、満足が遅らせること、ストレス発散、衝動のコントロール、個人や <u>グループ</u> での <u>挑戦</u> を頑張る能力も含む。
他者への気づき (Social-awareness)	物事を適切に処理できるように情動をコントロールし、挫折や失敗を乗り越え、また妥協による一時的な満足にとどまることなく、目標を達成できるように一生懸命取り組む力	これは、 <u>自分と同じあるいは異なる背景や文化をもつ人々の視点</u> を取る能力や、思いやりを強めて感じることができる能力を意味する。さまざまな設定の中での社会的行動規範を理解し、 <u>家族・学校・コミュニティ</u> の資源とサポートを認識することも含まれている。
対人関係 (Relationship skills)	周囲の人との関係において情動を効果的に処理し、協力的で、必要ならば援助を得られるような健全で価値のある関係を築き、維持する力。ただし、悪い誘いは断り、意見が衝突しても解決策を探ることができるようにする力	健康的でやりがいのある関係を築き維持することや、また異なる <u>社会規準</u> や <u>社会的要求</u> がある状況の間を効果的に移動するために必要なツール(スキル)を意味する。また、明確なコミュニケーション、傾聴、協同、不適切な社会的圧力への抵抗、対立場面での建設的な交渉、必要なときの援助要請が含まれる。
責任ある意思決定 (Responsible decision-making)	関連する全ての要因と、いろいろな選択肢を選んだ場合に予想される結果を十分に考慮し、意思決定を行う。その際に、他者を尊重し、自己の決定については責任をもつ力	このコンピテンシーには、さまざまな状況において、 <u>個人的行動</u> や <u>社会的相互作用</u> について思いやりのある建設的な選択をするための知識、スキル、態度が必要である。そして危険な行動について、倫理的基準、安全への関心、行動面での規範を批判的に検討する能力と、自己と他者の健康や幸福を考慮する能力が求められる。

(出典) <sup>1</sup> 小泉 (2011) <sup>2</sup> Jagers et al. (2018)

(注) 下線は著者による挿入で、特に教育的公正が関連すると考えられる内容である。

して、①内容や方法が、必ずしも人種や文化の多様性が考慮されたものとなっていない点と、②SELの対象が子ども中心であって、その子どもに関わる大人が対象に含まれていない点が挙げられている (Gregory & Fergus, 2017)。この内、①についてはCASELが提唱するSELで育成をめざす5つのコンピテンシーも改訂が提案されている (表2) (Jagers, Rivas-Drake, & Borowski, 2018)。また、こうしたコンピテンシーを育てるために、現在のSELをもとに“変革的SEL(transformative SEL)”が提唱されている (Jagers, Rivas-Drake, & Williams, 2019)

が、具体化はこれからの課題と考えられる。

### 子どもに関わる大人のSEL

セッション数で次に多かったのが、教師を対象にしたものである (表1)。先に、現在のSELの問題点の2点目として、SELの対象に子どもに関わる大人が含まれていない点が挙げられていることを述べた (Gregory & Fergus, 2017)。SELの定義には、子どもだけでなく成人も含まれているので当然なのであるが、子どもの環境という点では保護者、教師、地域関係者等をすべて考慮する必要があ

ると言える。表1では、教師に続いてコミュニティや学校外施設等(社会体育や放課後の活動など)での実践がテーマとなっており、これらが一定の動向として存在するようになってきていることがわかる。

なお、大人を対象にしたSELの場合、本人の社会性と情動のコンピテンシーを高めることを目的とするのか、それによって子どもの育成を図ることを目的とするのかを区別する必要がある。前者の該当するものとしては、情動知能(emotional intelligence)(例:ゴールマン, 1996)などがあり、すでに社会的に周知されつつあるが、後者についてはまだ実践は緒についたばかりと言えよう。

### わが国でのSELの実態

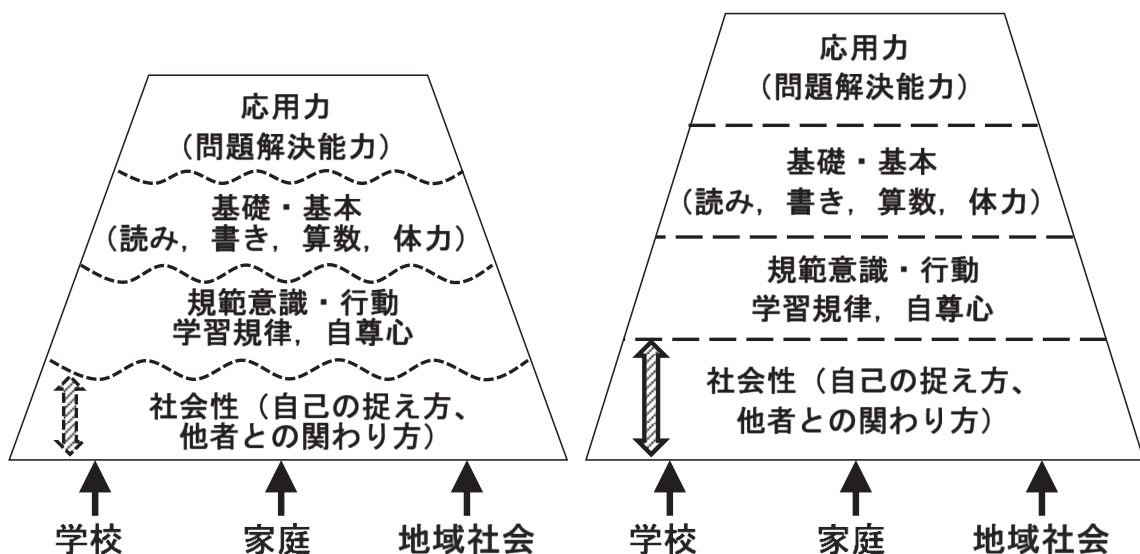
#### 教育的公正への取組

近年、日本社会の問題点として格差社会や二極化などが言われるようになり、子どもを取り巻く環境としても子ども食堂などが話題になっている。また、相対的貧困率(世帯の所得がその国の等価可処分所得の中央値の半分に満たない人々)の高さが注目されている。例えばOECD対日経済審査報告書(2017年)では、G7の構成国である日米欧主要7カ国の中で日本は相対的貧困率が2番目に高くなっていた。こうした家庭環境やあるいは周囲の地域社会の違いによる教育におけるニーズの違いは、図1で示した「踏み台」によって教育の効果を同一にする必要がある。上で見たように、アメリカでのSELの実践は、そのための手段として種々のSELプログラムが利用できる可能性を示してい

る。わが国においても、今後、教育効果を一定のレベルで保障するための取組として、教育的公正に主眼をおいてSELを位置づけることが期待される。

この点に関して、現状での一つの可能性を紹介したい。筆者が実践に関わっているSEL-8S(Social and Emotional Learning of 8 Abilities at School)プログラムでは、図2(b)のようにSELの位置づけが示されている(小泉, 2011)。すなわち、SELで社会性が育まれることによって自尊心が高まり、規範意識・行動や学習規律が身につく。それによって、基礎・基本の学習が成立し、さらに応用力を身につけることができるようになると考えられる。これは、学校生活への適応促進の要因の一つともなる。この図の社会性は、正確には“SELなどで身に着けることができる社会的能力をもとにした社会との関係性”を意味しているが、簡潔に「自己の捉え方と他者との関わり方」と説明されている。この図式では、以上の構造を支える要素として、最下部に学校とともに家庭と地域社会が位置づけられている点に注目したい。

ここで、社会性が十分に身につけていない子どもは図2(a)のように社会性が低く、その上にある層も脆弱な構造になってしまう。しかし、社会性が身につくと、図2(b)のように一番土台となる層が磐石になりその上にある層も十分に身につけてくることになる。図2の図式を教育的公正の観点から見ると、台形の構造の土台となる社会性を支える学校、家庭、地域社会の教育力が鍵となる。その教育力を高めることができれば、環境の違いが適切に補われて、どの子どもも社会的自立ができるよ



(a) 社会性が低い場合

(b) 社会性が高い場合

図2 学力・学校適応と社会性(社会的能力)(斜線入り矢印)の関係  
(注) (a)では社会性が不十分で未発達だが、(b)ではより磐石になっている。

うになる。そこでは、SEL-8S プログラムがそうした教育的公正を実現するための手段になりうることを示唆している。

### 子どもに関わる大人の SEL

SEL の教育的効果を高めるためには、教師や保護者そして地域社会の人々（社会教育関係者等を含む）など子どもに関わる大人の要因が重要である点は、上で見たとおりである。この点のアメリカの動向は、今回の SEL-EXCHANGE のセッション数（表 1）でも確認できるが、わが国ではまだまだ不十分である。

教師に関しては、SEL によって教師自身の社会性と情動のコンピテンスが向上することが報告されている（山下・小泉，2019）。しかし、こうした教師の社会的能力の向上が、児童生徒にどのような教育的効果をもたらすのかといった研究には至っていない。

保護者については、子育て支援という領域で多数のプログラムが開発されているが、その構造が不明確で、特に教育効果の確認が不足している点が課題である（藤田・小泉，2016）。確かに、学校での SEL の取組が保護者の養育態度に好ましい影響を与える傾向があることは示されている（小泉・井上，2017）。しかし、保護者を直接の対象にして SEL を実施し、それがどのような教育効果をもつのかを実証的に検討した研究は見当たらない。

さらに社会教育面では、ほとんど取組がなされていない。したがって、より大きな視点から、子ども・学校・家庭・地域社会の全体を一つのシステムとして捉えた実践も見受けられない。今後の取組が必要である。

最後に、SEL-EXCHANGE の全体会での印象深い場面を紹介しておきたい。実際に学校等で SEL を受けて育ってきたさまざまな人種の若者が壇上に上がり、自分たちの体験談や意見を語ったり、あるいは仲間の非行防止や行動改善のために日常生活でどのように接したり活動しているのかを寸劇で示す場面がいくつかあった。SEL の成功事例を、教育を受けた本人たちがアピールしていたわけである。国の状況や教育事情が異なるが、いずれ日本でも、こうした場面が SEL 関連の学会や研究会あるいは研修会等で発表される日が来ることを期待したい。

### 引用文献

Collaborative for Academic, Social, and Emotional

- Learning. (2012). *2013 CASEL guide: Effective social and emotional learning programs, preschool and elementary school edition*. Chicago, IL: Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning.
- Durlak, J. A., Weissberg, R. P., Dymnicki, A. B., Taylor, R. D., & Schellinger, K. B. (2011). The impact of enhancing students' social and emotional learning: A meta-analysis of school-based universal interventions. *Child Development, 82*, 405-432.
- 藤田尋子・小泉令三 (2016). 家庭教育支援における保護者向け学習プログラムの分析—教師による学校・家庭連携推進の視点から— 福岡教育大学大学院教職実践専攻年報, 6, 39-46.
- ゴールマン・D 土屋京子 (訳) (1996). EQ〜こころの知能指数 講談社
- Gregory, A., & Fergus, E. (2017). Social and emotional learning and equity in school discipline. *The Future of Children, 27*, 117-136.
- Jagers, R. J., Rivas-Drake, D., & Williams, B. (2019). Transformative social and emotional learning (SEL): Toward SEL in service of educational equity and excellence. *Educational Psychologist, 54*, 162-184.
- Jagers, R. J., Rivas-Drake, D., & Borowski, T. (2018). Equity and social-emotional learning: A cultural analysis. *CASEL Assessment Work Group Brief series*. Retrieved from <https://measuringcel.org/wp-content/uploads/2018/11/Frameworks-Equity.pdf>.
- 小泉令三 (2011). 子どもの人間関係能力を育てる SEL-8S 1 社会性と情動の学習<SEL-8S>の導入と実践 ミネルヴァ書房
- 小泉令三・井上豊久 (2017) 小学校での SEL-8S プログラム実践による保護者の子育て支援—実践校における「子ども対象の SEL による子育て支援モデル」の検証— 福岡教育大学紀要 第四分冊 教職科編, 66, 117-124.
- Maguire A. (2016). Interaction Institute for Social Change. Retrieved from <http://interactioninstitute.org/illustrating-equality-vs-equity>
- OECD (2017). OECD 対日経済審査報告書 2017 年版
- Skiba, R. J., Horner, R. H., Chung, C., Rausch, M. K., May, S. L., & Tobin T. (2011). Race is not neutral: A national investigation of African American and Latino disproportionality in school discipline. *School Psychology Review, 40*, 85-107.
- 山下 健・小泉令三 (2019) 若年層教員の対児童関係における社会的能力向上の取組—小グループによる研修プログラムの実践— 日本学校心理士会年報, 11, 83-94.

